3.11 東北ユースダイアログ　公開用報告書

■開催日時　2022 年 12 月 11 日（日）13：00～16：00
■開催先　　岩手大学、東北学院大学、福島大学、オンライン
■開催方法　対面とオンラインのハイブリット
■参加者数　36 名（参加者 11、運営 21、登壇者 4）
■登壇者　　４名
・福島県国見町で被災し、現在は愛知県に在住（A さん・オンライン参加）
・岩手県大槌町で被災し、現在は岩手県に在住（B さん・岩手会場で参加）
・岩手県釜石市で被災し、現在は宮城県に在住（C さん・宮城会場で参加）
・福島県南相馬市で被災し、現在は福島市に在住（D さん・福島会場で参加）

■登壇者の話の概要
（プライバシー的な内容も含まれるため、抜粋／概要版としてまとめています。）
＜A さんの経験談＞
　震災当時は小学校低学年。福島県の国見町に住んでいた。母と祖父、猫とウサギで暮らしていた。私の小学校は制服で登校して体操着に着替え、帰りにまた制服に着替える。ちょうど制服に着替えているときに地震がきた。揺れが大きく、掲示物の画びょうが飛んできたり、机を押さえるのに精一杯だった。怖くて、いい子にするから地震止まってほしいと思った。校庭に避難したら、みんな泣き叫んでいて、私も号泣していて、先生達が抱きしめてくれた。学校では、みんな一回家に帰るように言われ集団下校した。帰っている時に帰宅中の母と会い家に帰った。
　家の壁はヒビが入って、食器や冷蔵庫の中身が全部出てぐちゃぐちゃだった。水が出なくなるので、母が水を浴槽に貯めたりしていた。電気も水もなく、サイレンや余震も多くて、怖い夜を過ごした。母の実家が梁川町という車で 20 分 30 分のところにあり、ガスで井戸水も使えたので、猫と私と母と祖父と避難した。ウサギはウサギ小屋も大きくて連れていけなくて、それが心残り。夜は余震でストーブは使えず、みんなでくっついて寝た。
何日かして、母から愛知県に行くよと言われた。4 月位には帰れると思っていた。なんで行かなければならないかわからず、行きたくなくて嫌な気持ちだった。すぐに帰れると思っていたが、小学校に入ることになって、ずっといるのかなと感じた。
小学校に入り、友達もいないし、知ってる人もいない。愛知に来たが、母は知り合いがいても、私は知ってる人もいない。人生を一から始め直す感じだった。知らないことがあっても誰に聞けばいいかわからないし、私の味方は母しかいないと思っていたので、寂しい日々を過ごした。
　小学校の友達に、震災のことは言えないし、一番引っかかっていたのは、方言の問題。愛知県も福島もなまっていて、言葉の食い違いで、相手を傷つけたり、傷ついたりしたことが頻繁にあった。どうしたらいいかわからない気持ちが多く過ごしていた。
小学 4 年生の時に震災の経験を忘れてはいけないと思い夏休みの課題であった作文で、当時の感情や震災について書き、見つめ直すことができた。思い出す中でなぜ自分が震災に合わなければならなかったのか悔しさが込み上げてきた。震災の日から福島の同級生と誰とも会えず、人生を 1 から始め直さなきゃいけないということで、ずっと震災は自分にとって悪なものでしかなかった。
　中学生になり友人に震災のことを話してみたが、いじめやバカにされることはなかった

ので話してもみんなあっさりしている印象がある。
そこから大人にも聞かれたら話すようになったが、大人たちは「津波が来なくて良かったね」と話す人が多かった。確かに津波は来ていないけど自分にとっては原発によって大好きな土地を離れることになったので全然良くないのにという気持ちがあった。高校に入りボランティアをする部活に入部した。自分の時はコロナで行くことができなかったがインターアクトクラブは震災の 1 年後から東北へボランティアに行っていた部活だった。顧問や先輩に震災について話す機会も増え、震災について振り返ることが出来ていた。ボランティアの方たちがたくさん支援していたこと、いろんな人に助けられていたことを高校に入ってから知ることができ、愛知へ来たことは震災がきっかけなので私にとっては良い事ではないけれど、人生の起点にはなったのかなと思う。今でも福島に戻りたいとたまに思うことがあり、福島にずっと居たらどんな人生だったのだろう？と考える。愛知でもたくさん出会いあり、今はそこまで悪に思ったりしていない。
　お母さんや家族に震災のことを直接的に話したことはないが、何回か福島に帰りたいと言ったことがあった。お母さんも帰りたかったが私のために名古屋に残る方がいいのではないかと言われた。お母さんとは福島にいたら、やりたいことがもっと出来ていたかもしれないと喧嘩もしたことはある。お母さんも帰りたいけどあなたのことを想って愛知にいるんだよ、愛知にいるからいろんな経験が出来ているんだよと言われた。お母さんの言葉で救われたこともあった。
　今の夢は看護師になること。無償でもボランティアでもいいから災害現場へ駆けつけられる看護師になりたいと思っている。震災の時にいろんな国の方も助けてくれたというのを聞いて震災が他国で起きた際も心の面でも看護師という面でも助けられたらと思う。

＜B さんの経験談＞
　岩手県大槌町出身。小学校高学年だった。体育の片づけをしている時地震にあった。上靴のまま外に出て、すぐ上の公民館に避難することになったが、なかなか避難がはじまらなかった。親が迎えに来た子ども達の引き渡しをするかどうかで遅れていた。残りの子ども達は避難することになった。普段使っている道路は渋滞していた。
　一人だけ山から下りてくる人がいて、顔をみたら父親だった。消防の仕事をしていたが、休みで、祖父母を山の上に避難させたので、あとは頼むと職場に行った。山の上に行くと祖父母、母と合流できた。遠くで砂ぼこりがあがり、津波がきた。更に山にあがれと声があり、走って逃げた。ふと町を見下ろすと、町全体が海になっていた。これは父はダメじゃないか。ダメかもしれないねと母と話し、呆然と町を見ていた。
　一時避難所で 5 日間の避難生活。母は看護士だったので、救護室での仕事をすることになった。大丈夫だと言われたが、行かないで欲しかった。
父とは無事に再会できたが、まわりには家族を亡くした人もいて、再会したことを喜ぶことができなかった。父はその後も災害対策本部へ行き、いないことが多かった。
　小学校も火事で燃えたし、公民館にも火事が迫っていて、山から避難してくださいと言われたが、祖父母は足が悪く連れていけず、残ることになりここで死ぬのかと思った。その後、祖父母の親戚の内陸の家へ行き 5 日間、母の実家で 1 ヶ月くらい避難生活をした。
　避難先を移動したがどこにいくのか説明がなく不安だった。内陸に避難したので、津波や火事はなかったが、車窓からたくさんの消防車が東京や大阪から来ていて、すごい災害だったんだと実感、理解した。

内陸に避難したが、１年間は大槌に戻り過ごした。小学校も被災していたので今までとは違う学校生活だったがとても楽しかった。その後、内陸へ引っ越したがそこからが自分にとって苦しい時間だった。家族での当たり前の行事や景色、生活が無くなってしまったことが理解できなかったため３月 11 日から時空が崩れてしまい、自分だけ良くわからない空間にいるような感覚だった。内陸の小学校だったので同じ県内でもなにも変わらない生活を送っている人もいる中で自分だけが非日常を過ごしていると感じていた。沿岸にいれば被災した方と震災を共感する時間があったかもしれないが周りと共感する機会もなく、受け入れるのにかなり時間がかかった。その中でも一番長く時間がかかったのは親友と思っていた友人が亡くなったこと。亡くなったと聞いたときは泣くこともできず、理解ができず、高校・大学へ進み時が経っても理解ができなかった。悲しみを正しく感じられていない自分ってどうなのだろう、その子についても考えることで悲しみに浸ろうとしているのではないか、自分は感傷的になりたいのかと罪悪感すら思うようになった。震災から 10 年目に新聞記事を見たときに母と時間を作り、亡くなった友人のことについて相談した。親友だった事実は変わらないし、あなたが忘れなければみんなも忘れない。2021 年、2022 年とやっとお墓参りに行くことができた。またお墓参りに行くことで彼女に向き合うことに対して気持ちの整理もできたと思う。

＜C さんの経験談＞

小学校低学年の時、釜石市で被災した。金曜日で連絡袋に宿題を入れながら休みのことを考えていた時に地震が発生した。あの時の揺れはこれまで感じたことがないくらい大きくとても怖かった。後ろの女の子が泣いていたり、先生が励ましてくれたのが印象に残っている。

揺れが収まり、一旦屋上に避難したが、隣の中学校の生徒が一気に校庭を横切り避難する姿を見て、自分たちもその後を追って逃げた。あとで校舎は津波でのまれ、3 階に車が突き刺さっていたので、そこに残っていたら生きていなかっただろう。

最初にいつも訓練している老人ホームに避難したが、津波がくるというので、中学生に続いて、第 2 避難場所に避難した。中学生に手をつないでもらって逃げた。そこに到達すると、津波が目の前に迫ってきて、更に横の山に登った。

雪が降ってとても寒かった。津波がひいたという声で、山を下りたが、町が壊滅的で、ガレキが積まれ、家がひっくり返っていた。自分の想像をはるかに超えた光景でショックだった。避難所を転々と過ごし、両親に会うのが遅かったので、不安でいっぱいだった。友達の親が迎えに来るなか、自分だけ迎えに来てなくて、しくしくと泣いてしまった。その後、避難生活の中で沢山の方に助けてもらってここにいる。

避難所は釜石市の内陸だった。管理する方がスーパーを経営していて、缶詰やレトルト食品を支給してくれ、困ることはなかった。仮設住宅でも全国から支援物資を沢山いただいた。まわりの人が配慮してくれたからだと思う。仮設住宅では小 2 から中１まで生活した。不便だった記憶はない。大人がサポートしてくれたからだと思う。サポートしてもらった分、これからは自分もサポートしていかなければと思った。

高校時代にメッセージプロジェクトを立ち上げた。メッセージプロジェクトは①大漁旗プロジェクト②防災出前授業プロジェクト③折り鶴プロジェクトの３つのプロジェクトから構成しており、メインに携わったのは防災出前授業プロジェクトになる。防災出前授業プロジェクトに取り組んだ経緯は高校２年生の時が震災 10 年目の節目だったこと、震災の

時に生まれた子が10歳になり震災について理解できる年齢になっていることから震災を風化させないため、自分たちの経験を構成に伝えていくために防災出前授業をすることになった。実際に釜石市内の小学校 2 校へ授業に行き、自分たちの意見にならないように、小学生目線で伝えるということについて工夫して伝えた。震災の出来事を紙芝居にしたり、震災を経験された方、周りの方へインタビューを行ったりもした。震災を経験し、助けてもらってばっかりで自分にできることは何かと考え始めた。今回経験したことを思い出すこと、そして子どもたちに伝えていくことも大事だなと実感した。自分も今度は支える側として震災を風化させないように活動していきたいと強く思った。大学でも震災に関わる活動をしているがこれからも続けていきたいと思う。自分も津波は悪いものだと思っていたが、震災があったから自分もたくさんのことを吸収し学び成長することができた。

＜D さんの経験談＞

当時、福島県南相馬市で小学校高学年だった。帰りの会の準備をしていた。教室の後ろのロッカーからランドセルを取ろうとした時に地鳴りがあり、地震がきた。訓練のようにはとっさに机の下に隠れることができず、大きなテレビが落ちたり、ガラスが割れた。校庭に避難したが、泣き叫ぶ声が飛び交っていた。兄弟 4 人同じ小学校に通っていたので安否を確認でき、私は低学年をみた。その間も津波の警報がアナウンスされていた。

父は隣の市、母も老人ホームで働いていたので、祖母が迎えにきてくれた。食料を確保しようと、コンビニに行ったが、お酒とか瓶が落ちて匂いがすごく、なにも買えず家へ戻った。うちは海が近くなかったので、津波の心配はなかったが、家は瓦が散らばっていたり、壁が壊れていた。

父は夕方に帰ってきたが、母は老人ホームで働いていた。真っ暗になってから、泥だらけになった母が帰ってきた。たぶん父が迎えにいったのだと思う。利用者をおぶって津波から逃げた。施設にはひいおばあちゃんも入っていたが、寝たきりでおいてくるしかなかったと、涙目で、見たことない表情で帰ってきたのが忘れられない。その夜は茶の間でテレビを見て過ごした。

原発のニュースが放映され、爆発の音を聞いた。原発から 30 キロ圏内で避難しなければならず、会津の母の実家に 10 人で押し掛けた。迷惑かけたなと思う。生活環境が変わり、祖父母は窮屈に感じて、実家に帰った。私たち 6 人は会津に残ったが、1 年もたたず、5 年の 3 学期からは、相馬市の仮設住宅に移った。

会津に避難したときは危機感もなく、会津にお泊りにいくくらいの感じだった。小学校の申請や働く手続きで、長くなるのかもと薄々感じていて、早く帰りたいと常々感じていた。

会津の母の実家から相馬の仮設住宅へ移り住んだ。小学校の隣の地区でプレハブを建てて小学校が再開しそこへ通っていた。仮設住宅からはバスが出ており 30 分かけて通った。両親が共働きだったこともあり、学校が終わってから夜までは南相馬の元の実家で両親の迎えを待ち仮設住宅へ一緒に帰るという生活を送っていた。仮設住宅では物資など配給、外部団体の方がフリーマーケットやイベントなどの開催など支援者の方々に助けられた記憶がある。仮設住宅では部屋の数も少ないので 1 つの部屋にみんなで過ごす時間が長く、自分にとっては嬉しかったし楽しい時間だった。高校 2 年生で実家へ戻った。私は将来なにがしたいのだろうと考えるようになり、震災時の 4 年 1 組が大好きだったのでどうやったら会えるのかなと考えたときに、南相馬市をみんなが戻れるまちにしたいと思うようになった。企業することを目標に福島大学に進学し、被災時たくさんの人の支援に助けられ

たので私もそういう人になりたいと思い、災害ボランティアセンターへ入部。災害公営住宅に行った際に誰かにとって、昔を思い出す、誰かと話すっていいねと言われることがあり、人と繋がることって大事だと実感した。テレビ局に取材していただいたことがきっかけで担任の先生や友達と会うことができ、その時にみんなの状況を聞くことができ、みんなどこかで頑張って生きているんだなと思った。その一方で原発が原因でいじめにあっている友人もいることを知り、良い人ばかりではないんだなと思った。来年春から社会人として働くが起業するための準備だと思って頑張ろうと思う。悲しい出来事はたくさんあったが、震災が無かったらみなさんに会うこともなかったので今は貴重な体験をしたなと思う。

■登壇者の話から学んだことや今後も考えていきたいこと

今回のユースダイアログの登壇者は、津波被害（内陸、沿岸）、原発被害（帰還した方、避難先で過ごしている方）で被災の状況も異なり、また、次の災害に備える防災やボランティア活動を始めている方、友人の死をようやく受け止められるようになった方など、震災の受け止め方も多様であった。自分と同じ年代の若者の震災の経験と感情を率直に受け止め、被災者の多様性について改めて気が付かされた。

バズセッションでは、参加者一人一人が震災についての想いを話しており、若者同士で震災について語る機会が少ないことが感じられた。東日本大震災はすべての人が当事者であり、自分事だが、他者と震災について語る機会が少ないため風化していくと感じている。教訓を聞く、教訓から学ぶということも必要だが、もっと気軽にフラットに震災の経験を語る機会があると、防災意識が高まるのではないかと感じた。

以上